# アメリカ陥落6

## 戦場の霧

大石英司
*Eiji Oishi*

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

**ページ操作について**

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　安田忠幸

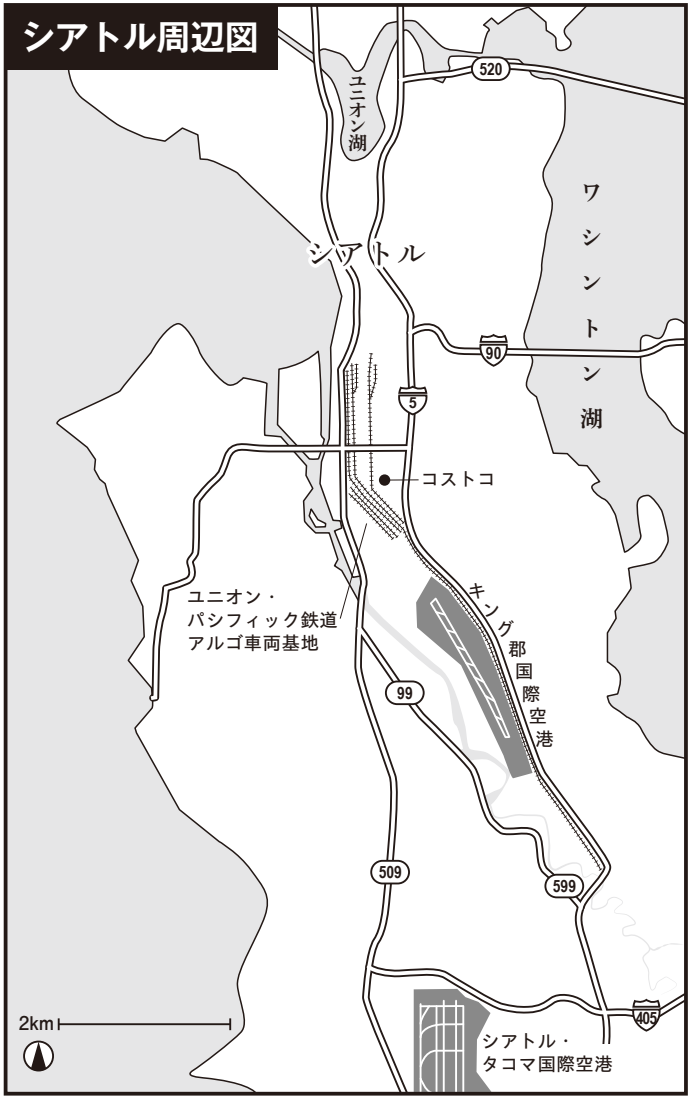
地図　平面惑星

# 目次

プロローグ　13
第一章　増援部隊　21
第二章　剣道　43
第三章　栄光の翼作戦　69
第四章　カリスマ　98
第五章　ワンサイド・ゲーム　124
第六章　ヤード　148
第七章　五里霧中　173
第八章　キンジャール　199
エピローグ　227

北米大陸とアリューシャン列島
【シアトル周辺図】へ
バトンルージュ
アチャファラヤ国立野生動物保護区
スウィートウォーター

ペトロパブロフスク
エルメンドルフ
アッツ島
シェミア島
キスカ島
コディアック島
アダック島
グレート・スキン島
5km
モフェット山
空港
滑走路
ハマーヘッド湾
ハマーヘッド
・ピーク
アダック島


シアトル周辺図
520
ユニオン湖
ワシントン湖
シアトル
90
5
コストコ
ユニオン・
パシフィック鉄道
アルゴ車両基地
キング郡国際空港
99
509
599
405
2km
シアトル・
タコマ国際空港

# 登場人物紹介

## 【日本】

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平　陸将補。北米派遣東郷司令官。コードネーム：デナリ。

〈原田小隊〉

原田拓海　三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンター。

待田晴郎　一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

田口芯太　二曹。原田小隊の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実　三曹。田口と組むスポッター。コードネーム：ヤンバル。

〈姜小隊〉

姜彩夏　二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。コードネーム：ブラックバーン。

福留弾　一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

姉小路実篤　二曹。ロシア語使い。コードネーム：ボーンズ。

由良慎司　三曹。西部方面普通科連隊から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

〈訓練小隊〉

甘利宏　一曹。元は海自のメディック。コードネーム：オリンピア。

花輪美麗　三曹。北京語遣い。コードネーム：タオ。

駒鳥綾　三曹。護身術に長ける。コードネーム：レスラー。

《水陸機動団》

司馬光　一佐。アダック島派遣部隊司令官。水機団格闘技教官。コードネーム：ヴィーナス。

〈第３水陸機動連隊〉＝〝在留邦人救難任務部隊〟

後藤正典　一佐。連隊長。

榊真之介　一尉。第１中隊第２小隊長。防大出の一選抜組エリート。

工藤真造　曹長。小隊ナンバー２。西方普連出身のベテラン。

●航空自衛隊

・第 308 飛行隊（Ｆ-35 Ｂ戦闘機）

阿木辰雄（あぎたつお）　二佐。飛行隊長。ＴＡＣネーム：バットマン

宮瀬茜（みやせあかね）　一尉。部隊紅一点のパイロット。ＴＡＣネーム：コブラ。

●統合幕僚部

三村香苗（みむらかなえ）　一佐。統幕運用部付き。空自Ｅ-２Ｃ乗り。北米邦人救難指揮所の指揮を執る。

倉田良樹（くらたよしき）　二佐。統幕運用部。海自出身。Ｐ-１乗り。

●在シアトル日本総領事館

一条実弥（いちじょうさねみ）　総領事。

土門恵理子（どもんえりこ）　二等書記官。

## 【アメリカ】

●陸軍

・第 160 特殊作戦航空連隊〝ナイト・ストーカーズ〟

メイソン・バーデン　陸軍中佐。シェミア分遣隊隊長。

ベラ・ウエスト　陸軍中尉。副操縦士。

・ミルバーン隊

アイザック・ミルバーン　元陸軍中佐。警備会社の顧問。かつてデルタ・フォースの一個中隊を率いていた。

〝モンキー〟　ナンバー２の黒人男性。

〝タイガー〟　分隊支援火器＆ドローン担当。

〝ウルフ〟　ショットガン担当。

〝ムース〟　狙撃手。

●海軍

・アダック島施設管理隊

アクセル・ベイカー　海軍中佐。司令官。

ランドン・ロジャース　海軍少佐。副司令官。

・ネイビー・シールズ・チーム７

イーライ・ハント　海軍中尉。

ホセ・ディアス　曹長。
マシュー・ライス　上等兵曹（軍曹）。狙撃手。
ティム・マーフィ　軍曹。

●ワシントン州陸軍州兵
カルロス・コスポーザ　陸軍予備役少佐。

●アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局（ＡＴＦ）
ナンシー・パラトク　捜査官。イヌイット族。

●テキサス・レンジャー
デビッド・シモンズ　中尉。
〈〝グリーン24〟プラトーン〉
ドミニク・ジョーダン　軍曹。リーダー。通称〝サージャント〟。

●〝ナインティ・ナイン〟＝〝セル〟
フレッド・マイヤーズ　教授。〝ミスター・バトラー〟。
トーマス・マッケンジー　大佐。通称〝剣闘士（グラディエーター）〟トム。
アラン・ソンダイク　少佐。
レニー・ギルバート　曹長。
ジュリエット・モーガン　〝スキニー・スポッター〟。動画配信ストリーマー。

●その他
西山穣一（にしやまじょういち）　ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レストランを経営。
ソユン・キム　穣一の妻。
千代丸（ちよまる）　穣一とソユンの息子。

## 【カナダ】

●カナダ国防軍（C）・統合（J）作戦（O）司令部（C）
アイコ・ルグラン　陸軍少佐。日本人の母を持ち、陸自の指揮（C）幕僚（G）過程（S）修了。

## 【ロシア】

●海軍

・特殊部隊（スペツナズ）第 101 分遣隊

レナート・カラガノフ　軍曹。スポッター。

マクシム・バザロフ　伍長。狙撃手。

●ロシア空挺軍

《第 83 親衛独立空中襲撃旅団》

ヨシーフ・ロマノフ　空挺軍少将。旅団長。

スピリドン・プーシキン　元海軍少佐。A 330 機長。

・第 598 独立空中襲撃大隊

ニコライ・ゲセフ　空挺軍大佐。大隊長。

パベル・テレジン　曹長。

・第 635 独立空中襲撃大隊

イーゴリ・ダチュク　空挺軍中佐。

アンドレイ・セドワ　空挺軍中佐。旅団参謀。

# アメリカ陥落6　戦場の霧

# プロローグ

広大なミシシッピ・デルタに位置するそこが、アチャファラヤ国立野生動物保護区のほぼ中心地だという知識を持った者はいなかったし、そもそもが隣州のテキサスから訪れた彼らは、アチャファラヤ国立野生動物保護区の知識も無かった。

ラファイエットを出た後、やたら真っ直ぐな道をひたすら走ったという認識しか無かった。その一本道は、実は全米でも三番目に長い橋として知られる全長一九マイルもあるアチャファラヤ盆地橋だったが。

真っ暗闇の中を走ったせいで、広大な湿地帯を横断しているという認識もなかった。湿地帯の中央を流れる川のキャンプサイトに降りた時も、ルイジアナ州の州都バトンルージュに入る最後の関門、ミシシッピ川の河畔に辿り着いたのだろうと勘違いした者もいた。

銃撃戦が収まってしばらくすると、野生保護区の雑多な騒音が蘇ってくる。カエルの鳴き声、夜行性の虫の大合唱や、動物の遠吠え。まるで野生のオーケストラのようだった。

彼らは、〝幌馬車隊〟と呼ばれていた。全米でほぼ唯一安全なテキサス州から、州外に暮らす家族を救うために、東へと向かう人々の集団だった。それぞれ自家用車三〇台前後で一つのグループを

編成し、もちろん武装した上で東を目指していた。多くは、北米南東部のフロリダを目指す人々だ。ネットも携帯も通じなくなった家族に食料や医薬品を届けに向かう人たちだった。

テキサス州西部のスウィートウォーターで日本料理レストランを営むジョーイ・西山こと西山穣一、ソユン・キム夫妻、そして一人息子の千代丸が乗ったヒュンダイ〝ソナタ〟は、〝グリーン24〟プラトーンのナンバーが振られた部隊に所属していた。チーム・リーダーは、頼りになる黒人の元海兵隊軍曹ドミニク・ジョーダン氏で、一行は、他の小隊とともに、トイレ休憩でその橋を降りた所だった。

付近に目印となる灯りはなく、キャンプサイトという話だったが、施設は何もない。木製の桟橋に穴を開け、衝立で囲っただけの仮設トイレは、いかにも急造だった。

だが、車を止めるだけのスペースはあった。ヘッドライトに照らされ、背の高い木が生い茂っているのもわかった。その鬱蒼としたジャングルの中で、そこだけぽっかり空間があった。

しかし藪蚊の襲撃は凄まじく、あまり長居したくない場所だった。

遠くから聞こえていた銃撃戦の音が近付き、隣の幌馬車隊が発砲を始めた時は、いよいよもう駄目かと思った。まずは交渉する——。決して撃つなと言われていたのに、誰かが焦って引き金を引いたと思ったが、そうではなかったらしいことがやがてわかった。

撃ちまくった相手は、物資を狙う賊ではなく、陸に上がっていたミシシッピ・アリゲーターだった。つまりはワニだ。

そんな話は聞いてないぞ！　と西山は青ざめた。深夜だというのに猛烈な暑さだが、ワニが窓から

襲ってくることに備えて、みんなが車の窓を閉め始めた。
　マグライトの灯りを掌で包むようにしながら、チーム・リーダーのジョーダン氏が一台一台仲間の車を回って状況説明していた。
　駐車場の一番奥に止められた西山夫妻のソナタには、最後にやってきた。
　後部座席では、一人息子の千代丸がチャイルドシートで眠っていた。
　ジョーダン氏は、助手席の後ろに乗り込むと、ドアを静かに閉めた。
「済まない。ワニが他にいるかも知れないのでね」
　ルームライトの下で、ジョーダン氏はメモ帳の名前リストの最後にチェック・マークを入れた。
「君らの所でやっと最後だ。流れ弾はどこにも当たってないかな？」とジョーダンはソユンに聞いた。
「はい。大丈夫です、うちの車は」
「フロントガラスに一発食らった車がある。でもガラスに孔が空いた程度で済んで良かった。ダクトテープで誤魔化せる」
「ワニは大きかったんですか？」
「そうだね。二メートルはあったかな。ここは川というか、運河沿いだからね」
「川ではないのですか？　アチャなんとかいう川沿い」
「そうじゃないらしい。そのアチャファラヤ川の東隣のウイスキーベイ運河。見た目はただの川だけどね。ここも別にキャンプ場じゃない。以前は、牧場だったらしい。何を飼っていたのかは知らないが。それが無くなった後、メキシコからの移民が勝手に入り込んでテント村を作った。そして、例の素敵な便所を作ったらしい。追い出すまで何

年も掛かったんだろうな。トイレ以外、水道も何もないが、屋根付きの炊事場だけは残っている。かまどがある。キャンプファイアーも出来る。明かりがないと何かと不便だから、今、隣のチームがその準備をしている。野生動物を遠ざけるためにも火は必要だ」

「ワニ以外にも何かいるんですか？」

「さすがにジャガーの類いは出ないと思うが、熊はいるらしい。ロッキー山脈やアラスカの羆（ひぐま）ほど大きくはないらしいが。毒蛇を踏みつけるのはまずいし、火は必要だという結論になった。夜明けまで、ここを動けなくなった。ワニの前に銃撃戦があっただろう。賊が、挨拶代わりに撃ちまくってきた。それで、何しろ全長一九マイルもの橋で、民家も無い。

　実は平和な時でも、夜間の橋は危険だと知られていたらしい。この自然保護区の横断は、最初からちょっとギャンブルだったが、奴らに嵌められた。避難民の対向車が走ってくるのでてっきり安全だろうと思ったが、その対向車自体が奴らの罠だった。まんまとそこに飛び込んでしまった」

「運河沿いに走る道がありますよね？　南北に走っている。遠回りになるけれど、私たちの目的はバトンルージュじゃない。そっちへ迂回できないのですか？」

「南側は、途中で道が消えている。北側は、十数マイルで、北隣の橋に接続しているが、バリケードが作られて、封鎖されていることがわかった。ドローンを持っている連中がいて飛ばして見たが、武装集団のバリケードだと解った。奴らは、こちらが音（ね）を上げて白旗を掲げてくることを待っている」

「どうするんですか？」

「一応、救援要請は出したよ。テキサス・レンジ

ャーのシモンズ中尉とどうにか携帯が繋がった時に。ほんの一瞬だったが。手は打つから、夜明けまで持ち堪えろということだった。携帯の中継器を積んだ無人機はたぶんちょくちょくここを回ってくるはずだから、状況は小まめに伝えるつもりだ。ただ、敵が黙っているとも思えないから、こちらも路上に何カ所かバリケードを作って、銃を見せびらかしながらそこを守るつもりだ。その時は、旦那さんにも加勢してもらうことになるだろう。ただ、お宅はレストランの経営者ということは、料理はできるんだよね？」

「はい。まともなキッチンや、せめてフライパンがあればですが」

「その手のキャンプ道具を持っている連中がいる。水はあるし、かまどで、スープの類いは作れるんじゃないか？　という話になった。みんなで食料を持ち寄ってね。蛋白質が必要なら、そこいらへんのカエルとか、蛇でも捕まえて一緒に煮れば良い……。冗談だ！」

「ええ……。良いですね、それ。ライスを持参しているので、たぶんリゾットの類いなら作れると思います」

「ぜひお願いします。ただし、坊やを一人にしないように。虫は多いし、刺されると拙い毒蛾みたいなのも飛んでいるだろうから、気を付けて下さい。何があっても、森の中には絶対に入らないように。危険だから。ノー・ジャングル。アリゲーター、ベア、スネーク！　デンジャー！　デンジャー」

英語下手な西山が、わかっていると二度三度「イエス！　イエス！」と頷いた。

ジョーダン氏が車を降りると、西山は「あの南部訛り、絶対わかんねえぞ！」とまたぼやいた。

「料理の話、聞いてた？」

「ああ。まあパック米はあるけどさ。薄めて、この人数分作るとなると、それにキャンプ道具って言ってたよな。コッヘルの類いは小さいじゃん。あれでいちいち煮るのか？　まあ、俺は鉄砲なんて撃てないし、そっちで協力できれば、それに越したことはない。でもさ、ジョーダンさんの地図から書き写した地図だけど、この辺り、真っ白じゃん？　人家なんて何もないぞ。その湿地帯を貫く、三〇キロもの長さの橋に乗ってしまったんだろう？　逃げ場所もないし、途中で橋を降りられる場所もほんの数カ所だ。そりゃ、賊は狙ってくるよな。バトンルージュの近くまで来れば、少しは治安もよくなるだろうと思ったのに」

「でも、その携帯の中継器を積んだドローンが飛んで来てくれるなら、少なくとも、テキサスの文明社会とは連絡が取れるってことじゃない？　お店の状況がわかるし、みんなに指示も出せるわ」

「そうだな。ちょっとそのかまどを見てくるよ」

西山は、息子の足下に置いた仕事用の長さ六〇センチのすりこぎを拾ってベルトに差し込んだ。

「格好良いだろう？　刀を差しているみたいに見える」

「そんなもんで、ワニと格闘しようなんて思わないでよ？」

「ワニなんて怖かないぞ！　俺は剣道有段者だ。あれほど部活に入れ込まなきゃなぁ、それなりの大学に入って、国を捨てることも無かっただろうなぁ……。でも別に後悔してないぞ！　ソユンとも知り合えたし」

「ドア、一瞬で閉めてよ！　蚊が入るから」

西山がドアを開けようとした瞬間、キャンプ場の入り口近くで、大きな火の手が上がった。まるで何かが爆発したみたいに明るい炎だった。誰かが、枯れ木を集めてガソリンをぶっかけて火を点

けたのだろう。火傷とかしてなきゃ良いがと西山は思った。

周囲が一気に明るくなり、陽気なアメリカ人たちが歓声を上げた。

「起きろ！　千代丸。キャンプ・ファイアだぞ！」

「止めてよ。あんなことしたら、目立って的になるだけなのに……」

「俺たちは元気だ、負けないぞ！　と賊に意思表示しているんだろう。やっぱアメリカ人はやることが違うじゃないか。日本人ならきっと、みんなで縮こまって森の中に逃げ込むぞ。さあ、起きろ！　千代丸。火を見に行くぞ。まるで夏祭りみたいじゃないか！」

「近付かないでよ。弾が飛んできたらどうすんのよ？　絶対ダメよ！」

「駄目か……。がっかりだな」

千代丸が目を覚まして、寝ぼけ眼（まなこ）で窓の外を見遣った。炎に気付くと身を乗り出し、口をぽかんと開けて見入った。

「いいわよ。行ってきなさい！　でもすぐ引き返すのよ。夜店があるわけじゃないんだから」

「そうこなくちゃ。アメちゃんたち、きっとワニ肉のバーベキューとか始めるぞ。塩胡椒を用意しとかなきゃな」

西山は、息子に靴を履かせて手を繋いだ。この子にとっては、一生の思い出になることだろう。そのためにも、無事に使命を果たして戻らなきゃならないと思った。

単に、テキサス目指してフロリダから脱出した昔の同僚を出迎えるという個人的なミッションだったが、出発したからにはやり遂げる覚悟だった。

アメリカは、石器時代に戻ろうとしていた。各州に於ける大統領選の結果を巡る大陪審判決が出

そろい、共和民主両派が激しく衝突して、各地で流血騒ぎになった。ニューヨーク・マンハッタン島は燃え上がり、ワシントンＤＣの官庁街は催涙ガスの充満で、職員らは脱出するしかなかった。議会議事堂は燃え、軍が動けないことで、ホワイトハウスは、イギリスから駆けつけた英国軍海兵隊兵士によって守られていた。

ロシアの破壊工作部隊が暗躍し、全国で山火事を起こし、また送電網を破壊したことで、全米のほとんどの州が停電し、上下水道も失われた。アメリカ人の七割が、今、電気もトイレもない生活を強いられていた。

そして全国で、陰謀論者たちによって扇動された暴徒たちが、破壊と略奪を繰り返していた。

アメリカの治安は風前の灯火で、カナダ国防軍から派遣された兵士や、太平洋を越えて派遣される日韓両軍の部隊によってライフラインや治安回復の試みが続いていた。だが如何せん、アメリカ大陸は広すぎた。

つい昨日、ロスアンゼルスで戦っていた自衛隊は、今日はアリューシャン列島の孤島で戦っていた。

# 第一章　増援部隊

バトンルージュから北西に七千キロ離れたアリューシャン列島のほぼ中央に位置するアダック島は、太平洋戦争当時、米軍がアッツ島キスカ島を奪還するために基地整備された島だった。戦後もしばらくは使われていたし、今も民間人が暮らす数少ない孤島で、滑走路を守り、降りてきた軍用機に燃料を提供するための僅かな施設管理部隊が駐留している。

ロシアがウクライナへ侵攻して以来、列島西側に位置するシェミア島とともに、海軍のネイビー・シールズ部隊を乗せた米陸軍の〝ナイト・ストーカーズ〟部隊のヘリ一機によって守られていた。島の戦力は、そのたった一機の特殊部隊仕様のヘリだったが、午前中に撃墜された。

パイロット一名が死亡。重傷を負った機上整備兵一人は、自衛隊によって救助され、乗っていたシールズのコマンド二人は、ヘリを狙撃した敵を探して島を横断する羽目になった。双方、狙撃銃で撃ち合ったが、霧が出て来てドローになった。その隙に、ロシア軍空挺部隊が、島の北側に聳(そびえ)るモフェット山中腹に降下してきた。

それに対して、自衛隊は、霧の晴れ間を突いてC‐2輸送機を着陸させ、特殊作戦群の一個小隊を降ろした。その機体は、アメリカ大陸西岸のシ

アトルから離陸したが、続いてもう一機、日本から出発したC‐2一機が飛来し、基地の南側のなだらかな場所で一個小隊を空挺降下させた。

基地というかアダック飛行場の南東にある町では、住民避難が始まっていた。この季節は本来稼ぎ時で、アラスカ本土から週二便民航機が飛んでくるが、本土の騒乱のせいでこの一週間、民航機は飛んでいない。ただ、帰りそびれたハンターや研究者、物好きな観光客らも留まっていて、普段より人口は増えていた。

陸上自衛隊特殊作戦群隷下・第1空挺団第40３本部管理中隊、その実、特殊部隊〝サイレント・コア〟の一個小隊を率いる原田拓海（はらだたくみ）三佐は、迎えに来てくれたネイビー・シールズ・チーム7（太平洋担当）隊員のイーライ・ハント海軍中尉の案内で管理棟へと向かった。原田はひっきりなしに衛星無線でシアトルの部隊指揮所と連絡を取り合っていたが、その間にも、状況はくるくると変わっていた。増援部隊の存在を報されたのも、地上に降りてからだった。

海軍司令部は、司令部というにはあまりに粗末で、まるでプレハブ小屋だった。管理棟は、ピカピカだがプレハブ棟を何棟か繋いだだけの粗末な建物だ。いかにも、ロシア復活に慌てて部隊を再開させた感じだった。

司令官室では、粗末な防弾ベストを着込んだアダック島施設管理隊司令官のアクセル・ベイカー海軍中佐が、滑走路側を見遣っていた。遠くから銃声が聞こえてくる。

「あれは何の銃声だ？　中尉。自衛隊はあんな山の裾野に降りたのか？」

「ここから五マイル以上は離れています。恐らく霧の中で、混乱したロシア兵たちが闇雲に撃ちまくっているのでしょう。一人がうっかり引き金を

引けば、皆が呼応する。それが戦場です」
　陽が傾いていることはわかるが、霧のせいで、モフェット山は見えない。山どころか、滑走路の端も見えなかった。この霧こそがアダック島名物だ。
　ハント中尉が原田三佐を紹介する。原田も、その銃声に関しては知らん顔をした。まさか、バヨネット一本持って空挺降下したシリアル・キラーが暴れているとはとても言えなかった。そもそも信じてももらえない。
　原田は、自衛隊の派遣部隊に関して説明した。
「自分らはブラボー小隊。もう一個小隊、チャーリー小隊が、港の南側に空挺降下しました。この、フィンガーベイ・ロードを走ってくることになりますが、しばらく時間が掛かります。たった今、降下したばかりなので」
　原田は壁の地図を指し示して説明した。
「君らだけで当面支えられるのか？」
「何しろ、ロシア軍はウクライナで鍛えられましたから、簡単にはいかないでしょう。増援が到着してもまだ数で負けていますし。スキャン・イーグルがすでに飛んでいるので、霧が晴れれば下界が見えますが。ただし、敵は対ドローン兵器も持ち込んでいるはずなので、いつもより高度と距離を取ることになります。日本からはグローバルホークも駆けつけるし、海上自衛隊の哨戒機も近くを飛んでくれますが、地上を掃討できるわけではない。ただし、航空自衛隊のF‐2戦闘機が、誘導爆弾を装備してエルメンドルフから駆けつけてくれるはずです。ウクライナと違い、ここは航空支援を得られます」
「霧が晴れればな……。障害物は建物しかない。車両を盾には使えるが、奴ら、それなりの対戦車兵器は持参しているだろう。そもそも防弾性能を

持った車両も僅かだ」
「敵が接近する前に、廃屋を使って防御陣地を作ります。戦闘機が飛んでくるまで持ち堪えるだけで良い」
　とハント中尉が提案した。
「中尉も知っての通り、ここの霧はしつこいぞ。日没までに晴れてくれるか。もっとも、この季節、夜はほんの数時間で明けるが。民間人の避難は一応、終わった。ただ、観光客の中には、まだ敵のスパイが潜り込んでいる可能性もあるから気を付けるよう部隊には命じてある。夜は冷え込むから、民間人を屋外に避難させるわけにもいかない。だが、港より南に家はない。敵はここで阻止するしかないと思ってくれ。状況によっては、シェミアからナイト・ストーカーズのヘリも来てくれるだろうが、何か聞いているか？」
「残念ながら、それは望み薄ですね。彼らは彼らで、たった一機でシェミアを守る必要がありますから。こちらは敵の増援にも備える必要があります」
「あると思うか？」
「シェミア攻略用の部隊が控えているはずです。われわれが強力に抵抗すれば、それがこちらに回ってくる可能性があるでしょう。アラスカ軍からは何か言ってきましたか？」
「いいや、ここはもう忘れられた基地だ。自衛隊が部隊を派遣してくれたなら、それでよしだろう。君ら、ウクライナみたいな、ドローン攻撃を喰らったら対処できるのかね？」
　中佐は原田に聞いた。
「一応、備えはしてきました。多めにショットガンを持ち、何より、ドローンが真上にくるより先に発見することが重要です。いわゆるＦＰＶドローン対策ですが」

「この霧が晴れたところで、白い雲を背景に飛んで来るドローンなんて、肉眼では簡単に見えないだろう。ましてや、モフェット山は雪を被っている。それを背景に飛んでくるんだ。青天でも背景に紛れ込むことになる」
「はい。肉眼ではなく、音で探すことになります。今、ＭＡＮＥＴ用のメッシュネットワークを張らせています。基地施設を囲むよう何カ所かに置いた集音マイクでドローンのモーター音を察知して、少なくとも、位置特定は出来るつもりです。探知は直前になり、応戦時間は限定されますが……」
「ＭＡＮＥＴ？　凄いな……。一応、基地内の無線ＬＡＮシステムもある。そっちがダウンした時は使えるようにしておこう。施設周辺しか使えないが。でも、応戦はショットガンで人力になるわけだろう？」
「はい。実弾を用いての迎撃訓練はしていますが、残念ながら、四軸制御のＲＷＳの機関砲で狙うほどの命中精度は出ません」
「海自の哨戒機が飛んでいるなら、霧の情報が欲しい。どの辺りで霧が出始め、いつ頃、どのエリアの霧が晴れるかが事前にわかれば、警戒度を上げ下げ出来る。われわれは歩兵ではない。どちらかといえばエンジニアの集まりでね。鉄砲を構えて何時間も警戒はできない」
「わかりました。上空からの予報が可能かどうか尋ねてみます。それ以前に、基地の兵士の負担にならないよう戦います。皆さんが自分で銃を撃つような状況は、われわれが全滅しているということなので、白旗を用意した方が良いでしょう。塹壕を掘って持久しても助けは来ません」
「まあ、そうだろうな。必要なものがあったら何でも言ってくれ。必要な場所に陣取って構わない」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。